



めじかじ通信

航海-87

めじかじ市民記者ネットワーク

市民記者の目から見た「こもろ」を発信していくページです。ちょっとへんてこりんな名前「めじかじ」。意味は「め=目」と「じ=耳」を使って、発見への「かじ=舵」をとろう。どうぞ期待！
またガッツのある取材記者を募集します。

▼問い合わせ先 企画課 情報戦略推進係

里山・農村体験はもちろん 海外からの誘客にも力を入れたい

Farmer's Guest House
里山暮らし体験宿 青雲館 代表 宮坂 一信さん (47歳)

築150年以上の古民家で「まるで田舎のおばあちゃん家のようにのんびりくつろげる」と好評の民宿が糠地にある。青雲館は、夏期に都心の学生を受け入れる「学生村」として50年ほど前に開業。3年前に一信さんに代替わりしてからは、里山ならではの体験プログラムに力を入れていく。そんな青雲館にとって、昨年は大きな節目となった。6月に宿泊施設を貸す人と借りる人をつなぐウェブサイトに登録したのをきっかけに海外からのお客さんが増えたのだ。外国人客の受け入れは1日2組限定にも関わらず、これまでに30以上の国から優に100人を超える観光客が訪れた。ロビーの壁にはお客さんが残した写真

がたくさん貼られており、どれも笑顔と感謝のメッセージがふれている。年末には、県内でもまだ珍しい「アーティスト・イン・レジデンス（国内外の芸術家を一定期間招へいし、滞在中の活動を支援する事業）」の施設として登録。3月末からシンガポールのミュージシャンが初めて滞在する予定だ。「絵画や造形作家さんの場合は名所に作品を配置して、村をまわってもらえば観光資源になります。糠地地区で手掛けているワインのラベルをデザインしてもらうのもいいですね」。



旅行者と一信さん（後）。「定番の京都などへ行く途中、ゆっくりするために立ち寄る外国の方が多いです。時間があるので交流を楽しんでくれます。文化交流に興味のある方はお出掛け下さい」

英語が得意ではなかった一信さん。外国人客の受け入れには不安もあったが、長年貿易マンとして世界を飛び回っていた中



「かつ丼が食べたい」というお客様を地元の名店に案内したことも

「困ったら夜でも電話して」と言ってくれたことが心強かった。今では一信さんだけでなく、70歳を超えるお母さんも積極的に英語を学ぶようになり、旅行者との交流を楽しんでいる。

「外国のお客さんに好評の家庭料理や日本文化については近所のお年寄りに講師を頼んでいます。そこに雇用が生まれますし、教えることが、張り合いになります」といいます。効果も目の当たりにしました。このように人材を活かした企画のほか、新日本歩道道紀行100選の「深沢渓谷の道」・高さ30mを超える「ねんぼう岩」・ブドウ畑・星空といった自然を活かしたプランを既に実施。今後は、地元食材でつくった「昔のごはん」をお膳で出する「戦国武将御膳」の提供を計画 중이다。

ゆらさんの四季の薬膳 春一番に飲む薬酒

梅、桜、桃……春の名花たちに出会える季節がやってきました。しかし、まだ冬の寒が残る春先は、体調を崩しやすい時期。そこで今回は薬酒を紹介してみます。酒の醸造はすでに新石器時代に行われていて、中国では、紀元前5百年頃には酒は病気の治療に使われていました。特に生薬（日本では漢方）と酒を合わせた薬酒が病気の治療や予防、美容、老化防止などに、現在もお楽しみされています。

春におすすめなのが「桃花酒」。桃の花は旧暦の3月3日に採取したもの20gを焼酎250ccに漬け、3〜5日後から1日2回、15ccづつ飲みます。病気を寄せ付けず、肌を美しくする美容効果が。また熟した木瓜（ぼけ）の実で作る（木瓜250gに焼酎1・8ℓ、氷砂糖100g）「木瓜酒」はリュウマチ防止に。不眠や老化防止には「枸杞（こごし）酒」。枸杞100g強は蒸留酒1・8ℓに漬けると7日で飲めますが、1回15〜20ccを薬として楽しめます。

（国際中医薬膳師 小清水由良）

（取材：文 村松 マヤ）